

やまと 民俗への招待

ムダで トロトロ ハーフ

鹿谷 熱

思い立って川西町結崎から天理まで歩いたのは、実は目的があった。太鼓踊り絵馬の所在確認のためだった。雨乞いやその願が叶つたときに踊られる太鼓踊りという民俗芸能が、かつては盆地部や大和高原、さらに吉野川流域などでさかんに踊られていた。雨乞いという機能を持った踊りで、共同体が主催する公の芸能だった。奈良市大柳生、吐山（旧都祁村）、下市町丹生地区、吉野町国柄、川上村東之川などでは今も伝承されている。賑やかで躍動的な踊りだ。

打つ青年、胸からカンコ
大太鼓を交代しながら

描かれた太鼓踊り

と呼ぶ太鼓を吊り下げて両手で打つ青年、小太鼓を手にして踊る少年やシテ（棧払い状のもの）を振つて調子を取る者などが登場するが、現在伝承されているものばかりでなく、絵馬に描かれて神社に奉納されたものもあり、「描かれた太鼓踊り」がたくさん残っているのも、この芸能が人びとに強い印象を残してきたことを物語っている。こうした絵馬は、18世紀前半から大正時代にかけて17例知られているが（1例はその写真のみ）、描かれている過程で『天理市太鼓踊りの事例を整理してある。史』の太鼓踊りの項目に「嘉

神井神社（川西町結崎）の天保13（1842）年の太鼓踊り絵馬（部分）。左に大太鼓、右の上から鉦・シテ・小太鼓役。筆者提供

神社の拝殿に掲げられている」とあるのに気がついた。天理市には、太鼓踊りの一部が伝承された紅しで踊りもあるので、ます現地へ行ってみよう。結崎から天理へ歩いたのだったが、両地区の神社を覗いた範囲では発見できなかつた。

土地によりその構成には変化があるが、絵馬も合わせると大小3種類の異なる太鼓を用いる。小太鼓・カンコ・大太鼓を交代しながら

太鼓の役が年齢により割り振られている様子も、絵馬から読み取ることができる。また子供が用いる小太鼓は、安堵町東安堵や王寺町畠田のようにな、皮ではなく紙貼りのものもある。小さな子供が扱いやすいように所作だけをする軽い太鼓まで用意していたのだった。天理市嘉幡と合場については、さらに調べてみたいと思っている。（「描かれた太鼓踊り」を整理した拙稿は、秋篠音楽堂から8月中旬に刊行予定の『秋篠文化』第12号に掲載される予定）

表

II 次回は8月28日

（奈良民俗文化研究所代